氏名・(本籍地)	神　達　知　純（東京都）
学位の種類	博士（仏教学）
学位記の番号	甲第46号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	**五重玄義の研究**
論文審査委員	主査　多　田　孝　正
	副査　多　田　孝　文
	副査　塩　入　法　道

神　達　知　純氏　学位請求論文審査報告書

「五重玄義の研究」

論文の内容の要旨

隋天台智顗（538 ～ 597）は，その生涯において諸経論の解釈を行っているが，多くの場合「五重玄義」を採用している。釈名・弁体・明宗・論用・判教の「五重玄義」は，先学達によって智顗の独特の経典解釈法であるといわれている。現に智顗が，総合仏教的視点から仏教体系を構築し，いかんなく釈尊の意を伝え得て，後世に大いなる影響をおよぼした要因の一つが，この「五重玄義」であると言って過言ではない。

しかし，「天台の独創である」という評価故に，これまでの仏教研究史上で「五重玄義」それ自体が研究の対象となることはあまりなかった。論者は，この点に着目した。「五重玄義」の背景にあるものはなにか。釈経における用い方，根底にある目的はなにか。論者はこれらの解明について以下二章各四節で論じた。

第一章　五重玄義着想の背景　1，「南三北七について」：天台の仏教体系は，中国南地，北地の仏教の諸説を研詳し，去取して構築されたことを見落としてはならないことを論じた。2，「天台大師教学と南北朝期の仏教」：智顗は南北両地の学風を研究した結果「己心中所行の法門」といわれる，仏教者としての心構えが構築されたものであることを論じた。3，「釈経と釈義」：中国仏教の経典解釈の歴史の中では，「法」の理解とその体得のために，体・宗・用などの視点から探究することが一般的であった。智顗においては，特にその傾向が顕著であったが，従来の構想を再考したものが「五重玄義」であると論じた。4，「天台大師と南岳慧思禅師」：『央掘摩羅経』の引用と如来蔵の思想の導入の異同について論じ，智顗は，衆生法の説明に如来蔵の意義は用いなかったと結論した。

以上，第一章は，全般にわたって天台仏教の背景にあるものを基本的に論じている。

第二章　五重玄義の構造とその意義では，四節を設け論じている。1，「五重玄義と四悉檀」：智顗の教学は，諸師が注目し得なかった「四悉檀」がポイントであると，論者の新見地から論じたもので，本論文の中心を成すものと言える。智顗の四悉檀に対する新たな理解が，釈尊の教えを伝えるという仏教者の指命へと展開し，これが天台仏教の教観二門にわたる全ての構想を成立させていると結論した。2，「天台大

師における経体の意義」：諸師の経釈中に体・宗・用などの構想の存在と個々の義が混然として扱われていることを検証した。その上で智顗は「五重玄義」において経体は実相であると明確な区別を設けたこと，それが教えから行への橋渡しの役割りと成っていると結んでいる。３，「天台大師における実相義一考」：四悉檀の意を理解されることによって，実相の意義を論述した。４，「天台大師における宗の意義」：智顗は衆生の因果が，実的仏の因果に直結していることを表明したと理解した。智顗の「宗」は，一経における旨とすべき教えという意義を明らかに超えている。凡夫から仏へ，迷いから悟りへ，仏道修行の道程を「仏自行因果」という端的な句によって説き示したものと理解すべきであると結論している。

本論は，全体を通して，天台教学の中心的課題「五重玄義」を扱いながら，人間はいかに生きるべきか，教えをいかに伝うべきかに現実を置いて論じ，新見地を随所に示しながら取り組んだことを見取ることが出来るものである。

審査結果の要旨

『玄義』巻十のいわゆる「南三北七」の教判論については，先学に「五時八教という独自の一大教判」を導き出すために展開されたかのように論じられている。しかし『玄義』巻十の叙述を改めて検討していくと，前代の種々雑多な教判論の中で確実な根拠があって，しかも経説に合致するものについては用いるという智顗の基本的な方針が示されていることの重要性に気付くのである。南三北七の教判論は，諸師の教判論を列挙してその深遠さを競い合わせるような類ではない。そのような視点が智顗の志向に合うのではないかと筆者は考えている。

智顗の仏教は，その教学が時代の中で孤高を誇っていたということを意味する訳ではない。五重玄義の独創性や特殊性をことさらに強調することは，智顗がこの体系を示した真意をかえって見えにくくするのではないかと考えられるのである。五重玄義もまた智顗による当時の仏教学研究の所産であって，智顗がその時代の仏教をどのように眺めていたかを追求することによって，五重玄義を着想し得たヒントも見えてくるのである。これは評価すべきことである。

『玄義』に引用された諸師の学説とそれに対する智顗の見解を資料にして，智顗の教学形式の特色を検討した。特に羅什や僧肇の学風を継ぐ南地の仏教学を通教の域を出ないものとし，一方で唯識系の経論や北地の地論・摂論学派の見解を別教の中で扱うことに着目した。智顗は四悉檀の意を得ることを『玄義』の中で重ねて強調している。確かに智顗は南北両地の仏教学にいくらかの限界点を見いだしていた。しかし多少の問題点があるにせよ，それらの学説を受容することによって智顗の教学体系が構築されていくことの重要性を見落としてはならないだろうことを論述した。

中国仏教ではその時代によって注釈形式が推移していくのであるが，その推移には時の仏教研究の動向が背景に存在するものと考えられる。たとえば注釈形式が「注」と呼称されるものから「疏」と呼称されるものへと推移していく東晋末から南北朝時代初期にかけて，中国では多数の経論が漢訳されていたのであった。そして智顗や吉蔵が活躍していた時代に玄談の別行という点で釈経形式に変化が見られたことは，唯識系の経論が六世紀前半に多数翻訳されていたことと関連がありそうである。このように智顗が法華経の文々句々を解釈した『法華文句』（以下，『文句』）とは別に『玄義』を説いたことはその時代にあっては特別なことではないと言えるだろう。

また次に釈義の先蹤について，釈経に最初に尽力した道安においてもすでに経題解釈，経の根本思想，経典の位置付けに言及がなされているし，五重玄義の要件は早い段階で現れていたと考えることもできよ

う。ただ経題解釈の面から見ると，智顗は特に「法」の解釈に力点を置く。「法」への意識は梁代の経典注釈書にもよく見られる。そしてこのことは『法華義記』や『涅槃経集解』等に五重玄義に類する釈義が存在することと何らかの関連があるのではないかと推測した。

智顗と慧思の師弟の関係は，僧伝類や現存している両者の撰述書からもある程度明らかにすることはできると思う。本節では主に，慧思『安楽行義』に述べられている「衆生」の意義，そして慧思から智顗に伝わったという『玄義』所説の衆生・仏・心三法の構造について考察した。また慧思に『央堀魔羅経』が頻繁に引用されることに着目し，両者の経典観についても検討した。以上の検討によって師弟の関わりを明らかにし，そこに慧思が語ったという「霊山同聴」の因縁を重ね合わせようと試みた。

「五重玄義と四悉檀」は，智顗が自身の教学を四悉檀によって方向付けをしようとしたことに着目したものである。言うまでもなく四悉檀は『大智度論』に説かれたものである。この四悉檀を智顗は独創的に理解して『玄義』に示している。

その中で四悉檀と五重玄義との対応関係が示されている。この対応から，五重玄義の構造を明らかにすることを目的とした。特に五重玄義がなぜ名・体・宗・用・教という次第をとるのかという点に着目したのである。

またその次第が実は智顗の教学全体において敷衍されていることを論じた。四悉檀との関わりからは，五重玄義，化法四教，四種四諦，四不可説等が智顗の思考の中では構造的に全く重なるのである。同様に，『玄義』の七番共解，『止観』の五略十広，『次第禅門』における章立てにも五重玄義は通じているし，さらには『文句』の四種釈や衆生・仏・心三法の構造との共通性も看取されるのである。これは構造上の話であり，具体的には種々の問題もあるだろうが，その点については後日の課題としなければならない。しかしここに着目し論を展開したことは，論者の今後の研究に期待の持てるところで大いに評価したい。

「天台大師における経体の意義」は，五重玄義に体の一義が設けられていることに着目したものである。古来，体と宗とは混然と扱われており，『玄義』ではなぜ体と宗との区別をあるのか，その点を明らかにしようと試みた。

智顗は若年より親しんできた『大智度論』の所説を手がかりに大乗経典に通じる理として諸法実相印を掲げ，それを経の体としたのである。北朝における大乗思想興起の気風もあったであろうが，智顗はここに大乗仏教の一つの理念を立てたのである。ただし理念はあくまでも理念であって，その理念をどのように実現していくかという課題があることを智顗は意識していたのであろう。五重玄義の体の次に宗・用が説かれていることにはそのような理由があると考えられるのである。

天台教学はまた「天台実相論」とも言われ，その実相論の内実はしばしば三諦円融，一念三千として示されている。三諦円融や一念三千という成句から離れて，『玄義』弁体段を資料にして智顗における実相の意義を検討した。

『玄義』には実相の異名として多くの名目が挙げられている。智顗は数多の名目が実相と同体異名であると論じている。智顗はここに名・義が異なることを理由に絶えない多くの諍いを諌めているのである。四悉檀の意を理解して，あらゆる名・義が実相の正体の異名であると了解することによって諍い解決の糸口を見出していったのである。

「天台大師における宗の意義」は，『玄義』における宗の意義を論じたものである。宗は今日でも用いられる通念であるが，本節では中国仏教において諸師が法華経の宗をどのように解釈していたかということを追いながら，智顗における宗の意義，特に『玄義』に示された「仏の自行の因果」を明らかにしようと

試みた。

第二節や第三節では体が理を示すことを論じたのだが , その理をどのように実現していけばいいのか。そのような問題を智顗は五重玄義の宗に込めたのではないかと考えるのである。

智顗の理解によれば , 法華経は迹門に弟子の実因実果を説き , 本門には師の実果を明らかにしているという。確かに , 法華経の迹門では , 仏は一仏乗をもって衆生に法を説き , 根性の熟した衆生は同一の悟りの味を得ることができると言う。その意味でたとえば童子が戯れに砂を集めて仏塔を作るような小さな善行に対しても仏道を成就する可能性が示唆されている。すなわち衆生の側にあらゆる因果を想定し , それが実の因果であることを迹門は明らかにしているのである。一方 , 本門は久遠実成の仏を説くが , その仏との師弟関係にこそ他の諸経には見られない法華経の因果の妙があるとしている。迹門において承認されたあらゆる因果が実は仏果に直結していると表明するものである。

そのような法華経の迹本両門の説相を読み取って , 智顗は法華経の宗を「仏の自行の因果」と定めている。つまり師弟 , 権実両面から因果を考えるならば , この因果を行じるのは「仏」と言いながらも , それはすなわち弟子であるところの個々人の問題であることが含意されているのである。よって智顗における宗とは , 一経における旨とすべき考えという意義を明らかに超えている。凡夫から仏へ , まよいからさとりへ , 仏道修行の道程を「仏の自行の因果」という端的な句によって説き示したものだと理解すべきだろうと結論した。

論者は , 最後に「このような課題を解決するには不十分な論考であるが , このことを見すえながら今後の研鑽を期す」と自戒しているが , 本論文は , ともすると形骸化しがちな現代の仏教学に新たな学風を示したものと言えるものである。

よって , 課程博士論文として認めるものである。